

(第5号様式)

学位論文審査の結果の要旨

| | |
|------|----------|
| 氏名 | 難波江 任 |
| 審査委員 | 主査 胡 柏 |
| | 副査 松岡 淳 |
| | 副査 市川 昌広 |
| | 副査 武藤 幸雄 |
| | 副査 香月 敏孝 |

論文名 我が国のフードバンク活動の状況と課題

審査結果の要旨

フードバンクは、食品ロス・廃棄物の削減による環境保全や生活困窮者支援による貧困改善と生活福祉水準の向上など、現在および未来社会のあり方にも深く関わる取組として注目される。フードバンクの設立が始まったのは、アメリカでは1960年代であるのに対して、日本では2000年以降であり、学術的に注目されたのもごく近年のことである。申請者は、フードバンク団体の運営者としてこの課題に取り組み、組織活動と運営実態の解明を課題としている。第1～3章から構成される主な研究結果は以下の通りである。

第1章は、国内で活動するフードバンク団体の概要を広範な資料収集により集計し、設立背景や活動の幅を独自の視点で整理した。集計分析では、2000年以降におけるフードバンクの急増はマスコミ関心の増大、経済情勢の変化、支援制度の成立等社会経済環境の変化と密接に係っていることを示した。アンケート調査では、各団体の活動趣旨を18項目抽出し、項目間の関連性から「生活困窮者支援」グループ、「食料のロス・廃棄の削減」グループ、「地域活性化・地域再生」グループに分類した。視点によっては違うグループ分けも可能であるが、本章の研究はそのための素材を提供し、フードバンク団体の設立目的は多様であっただけでなく、その活動が社会に広範な影響を及ぼす可能性があることを示唆した。

第2章は、関係団体の資料や独自のアンケート調査を基に、フードバンク団体の運営実態を、①活動団体の経営収支、②食料提供先や食料の数量構成、③食料提供元の企業別、一般（個人）別構成の3つの点から整理した。経営面では、多くの団体は人件費の確保ができない資金不足の状況にあり、大都市よりも地方の団体の方がより厳しい状況に置かれていることを示した。活動団体の経営収支は食料提供元となる企業数に比例し、食料配布先や配布量、活動人員数または活動量等に影響を与えることも明らかになった。大都市地域と地方の経済格差がフードバンクの活動水準と効果に直結していることを示唆した点は重要であり、活動の継続性や対策を考える上で極めて有意義であると言える。

第3章は、フードバンク活動における団体間・活動間の連携に焦点を当て、①フードバンクと自治体の生活困窮者自立支援事業間の協力、②フードバンクと子ども食堂の連携、③フードバンクと企業間の

連携、④フードバンクと関連団体（食料提供元、配布先、地域おこし団体、福祉団体、ボランティア団体、支援団体等）間の連携を取り上げた。こうした多方面の連携により、フードバンク活動に対する理解や認知度が向上し、活動範囲の広がり、需要と供給のマッチング改善による負担軽減等の効果をもたらしたことを明らかにした。

以上の結果を踏まえ、自治体関連事業の展開はフードバンク事業の定着に寄与していることやフードバンク団体の取組と生活困窮者自立支援事業等との連携によるセーフティネット間の相互補完の可能性を指摘し、フードバンク活動を促進するための支援策の制度化の必要性を提起した。

以上のように、本研究は、フードバンクという極めて重要な社会現象に着目し、申請者自らの取組を踏まえながら活動の全体像、活動団体の構造と運営実態・効果を観察、整理、評価し、学位論文に仕上げたものである。現場と共にある研究姿勢や研究実績の少ない課題に果敢に挑戦し相応の成果が得られた点は高く評価される。「生活困窮者支援」グループ、「食料のロス・廃棄の削減」グループ、「地域活性化・地域再生」グループ別検証による研究成果の体系化、個々事例の詳細な考察による活動内容と効果の深掘りなどの面で課題も残るが、学位論文として価値ある結果が得られたと評価できる。

本論文に関する公開審査会は平成 30 年 8 月 4 日、香川大学農学部で開催され、申請者の論文発表と適切な質疑応答が行われた。引き続いて行われた学位論文審査会で本論文の内容を慎重に審議した結果、審査委員全員一致して博士（農学）の学位を授与するに値するものと判定した。